



造園家 田中俊光
(株)ナインスケッチ代表

四季の移ろいに気づき 遊びながら五感を育める園庭

Vol. 9 最終回

『大地の再生』の連載ですが、今回が最後となります。最後は、『大地の再生』視点を取り入れた空間づくりについて事例をあげながら話していきたいと思えます。

Vol.7でも触れた浜松市西区の現場になりますが、ここは、お年寄りが通う介護施設などを中心に事業展開している社会福祉法人からのご依頼でした。数年前に保育園事業をはじめ、園舎はあったのですが、園庭がなく、ここの雑木林を手

に入れ、この荒れてしまった雑木林を子供達が遊べる園庭に変えていくプロジェクトになります。

子供達にとって必要な遊具は何かと考えると、何も必要なのではないかと思えます。アンパンマンやトーマスなどの遊具はなくてもここには自然環境が残っています。その中にはたくさん遊び道具が隠されています。落ち葉や枝、実を拾ったりし、それを子供達は遊び道具にすぐに変えてしまいます。地形も平らなところばかりではありません。高低差があり斜面を走り降りたり、よじ登ったりもできます。木登りしたくなる木もたくさんあります。鳥や虫などもきます。木漏れ日や木々の間を抜けてくる風なども感じられます。

また、園や学校、家庭では中々教えられる命についても学べます。秋に実が落ちて春には芽吹く、木に寿命がくれば朽ちてそれが土へとなりまた他の木々のための源へとなります。

たくさんさんの動植物の気配を感じられ、四季の移ろいに気づき、感動する心も養われ、遊びながら五感を育める園庭になれるのです。

ただ、それは、健全な雑木林を取り戻すことが条件となります。荒れてしまった原因はVol.7でも触れたので割愛しますが、『大地の再生』視点で土中の通気浸透水脈改善を基本とした自然環境の整備が必要となります。

作業内容としては、子供達の遊び場や人の動線を決めていきなり草や笹を抜い

たり刈るのではなく、まずは敷地全体に風が通るように草や笹を地際ではなく風が吹いた時に葉がなびく関節的な位置で刈っていきます。すると、地形や風の抜け道が見えはじめ、木々を残すところと人が活動するところの棲み分けが分かってきます。そこでやつと草や笹を地際で刈って人が通りやすいように整備していきます。要するに人が欲しいとされるスペースを図面上で決めるのではなく自然と対話しながら現場で空間づくりをしていきます。

合わせて、地形や木々の配置を見ながら土中の通気浸透水脈改善を行います。土中の空気と水の循環がよくなれば土は呼吸ができるようになり団粒化が進み、木々も含めた息づく全ての生命が息を吹き返し始めます。地上と地下での空気の循環が整えば、そこに息づく動植物がネットワークを組み始め、その後は自ずと心地よい環境になっていきます。人はその手助けをしてあげるだけでいいのです。逆に自然の力を借りなければ人にとっても快適な空間は産まれてこないと思います。

工事途中、子供達に遊びに入ってもらい、先生方の意見も伺いました。自然環境主体すぎて、子供達にとって危険なところが多すぎてもいけません。自然環境と子供達の遊び場との調和がとれた空間となるように、お互い譲り合いながら再度園庭づくりをしていきます。

自然を排除しないと人が活動する場や空間、住まいがつかれないことはなく、

連載の目的

執筆者の静岡県浜松市の造園家・田中俊光さんは、長い間、造園・エクステリアと建築、まちづくりの融合を考えた「空間づくり」を実践してきた方です。

田中さんの作る「雑木の庭」は、単に鑑賞する場所ではありません。その場にいると、不思議と「人を快適にさせる」空間でもあります。

しかし、中には、どうしても植栽が枯れてしまう場所もあります。どうしてなのか？田中さんは現状に満足しませんでした。その中で「大地の再生」という考え方に出会いました。そして探求を続けていくうちに、日本の住宅のほとんどが、雑木が枯れてしまう酸欠の土壌になっているのでは？という疑問を抱くようになりました。

果たして、現在の住宅業界、そして造園・エクステリア業界に、そうしたメッセージが受け入れられるのか。少しでも快適空間の創造に貢献できる業界にしていければという思いで、新しく連載を引き受けて頂きました。

ぜひとも、この連載を通じて、これからの日本の国土のあり方について、造園・エクステリアの観点から貢献出来ることを一緒に考えて頂ければ嬉しいです。

荒れた雑木林を、子供たちが遊べる園庭に！
自然を遊び道具にして、感動する心も養える



③人の活動エリアと自然環境（植物）の棲み分けが見えてきた



②土中の通気浸透水脈改善の様子



①着工前。草や笹が繁茂している



⑤土中と地上の空気通しが完了し、空気感が変わってきた



④工事途中に子供たちにも遊んでもらい、子供たちの遊び場と自然環境の調和がとれるか確認



⑥斜面を登って遊ぶ子供たち。もはや特別な遊具は必要なく、たくさんの動植物の気配を感じられ、四季の移ろいに気づき、感動する心も養われ、遊びながら五感を育てる園庭となった

自然と対話しながら進めれば人と自然が調和できる空間ができるのです。

今までの空間づくりは、図面を元に決められた物を作り上げていく建築や土木主体の進め方がほとんどでした。その過程では、その現場の地形や土壌や水脈環境など考えずに、安易に平らに造成したり、一律的な直線的な構造物を作るなど、もつと言うところ木々があればそれを伐採するまでして、自然環境を無視した人都合の進め方になっています。

そうではなく、その土地オリジナルのキャラクターをしっかりと読み取り、人が作るものが環境に対して邪魔をするのではなく調和できるようにつくっていくことが求められると思います。

そのためには、その地形や土壌、

水脈環境など見ながら、そこに息づく動植物の反応を感じ、空気の流れを体感しながら作業を進め、そこに人が求めるものを組み合わせていくことが大切だと思います。

作業のしやすい合理的な形状や構造など計算だけでクリアできる分野だけで決めるのではなく、空気や水の滞留など数字では表現できない、感覚的な部分が大切になってくるのです。自然環境主体で進めると、計画した内容を変更する必要も出てくるかもしれません。しかし、人優先でいくと一時は良い空間に感じるかもしれないですが、その水脈環境は滞り、動植物は住み辛い環境になり空気感も変わり、それが人にとっても不快になってくると思います。健全な自然環境をつくるのが結局は人にとっても快適な空間となってくるのです。

『大地の再生』視点の水と空気の滞留を考え、自然と対話しながら進める空間づくりが当たり前になる社会がやってくることを望みます。そのためには人の考え方がまずは変わらなければなりません。また、今の現代人にはなくなっている数字では表現できない感覚的なものを養わなければならぬと思います。そのためには教育環境から変えないといけないかもしれません。そうだとすると、この雑木林で遊びながら五感を育み、感性を磨いた子供たちが未来を変えてくれるかもしれない。そんな期待をしています。（元）

著者プロフィール

田中俊光（たなか・としみつ） 1979年東京都生まれ。
2002年、日本大学生物資源科学部卒業。大手住宅メーカーのグループ会社で外構造園専門部門に勤務し、転職後は造園・外構に加え住宅のプランニングも手掛ける。2013年3月に独立し㈱ナインスケッチを設立。雑木の庭をはじめ、エクステリア・外構のプランニング・施工管理に携わる。主な受賞歴：2011年、「ユニソン フォトコンテスト 2011」ファサードガーデン部門ゴールド賞受賞、2014年、「浜名湖花博庭園コンテスト」浜松市長賞受賞、2014年「第2回ブロックガレージデザインコンペ」入賞、2017年、三協アルミ「エクステリアデザインコンテスト 2017」ファサード部門 ゴールド賞受賞。資格：一級造園施工管理技士、一級土木施工管理技士、エクステリアプランナー1級、二級建築士。

この雑木林で遊びながら五感を育み、
感性を磨いた子供たちが
未来を変えてくれるかもしれない